

最近、森田ゆりさんという人が書いた『**体罰と戦争** 人類のふたつの不名誉な伝統』という本を読みました。体罰と戦争、一見、かけ離れたもののように見えるこの2つにはいくつもの共通点があるのです。近頃は、虐待でわが子を死なせてしまったり、スクールバスを待つ子どもを次々と襲ったりといった嫌な事件が頻繁に起きています。また、一方では、首相自ら、憲法を変えて日本を堂々と戦争できる国にしようとしていることに非常に不安を覚えています。

この本には、なぜ、このようなことが起きてしまうのか、どうしたら無くしていくことができるのかのヒントが書かれているように思います。

「人間はほかの動物と比べると、同類間の破壊的な行動が際立って見られる種です。同類間で傷つけ合い、殺し合う動物はほかにもいますが、人間ほどマス(大量)レベルで同類攻撃をする動物はほかにいません。そのような同類間攻撃行動のうち、何千年にもわたって止むことなく続いてきた人類のふたつの不名誉な伝統が、体罰と戦争です。」

として、体罰と戦争の二つの共通点が述べられています。これらの共通点にはそれぞれ説明が加えられており、ここでは割愛していますが、どれも、なるほどと感じるものでした。

- 共通点の1 どちらもそれがよくないことだとわかっていてもやめられません
- 共通点の2 どちらも大義名分があります
- 共通点の3 どちらも死傷しトラウマに苦しむのは、社会的に弱い人々です
- 共通点の4 どちらも深刻な人権侵害行為です
- 共通点の5 どちらも「時には必要」と考える限り、なくなりません
- 共通点の6 どちらも絶対にしないと誓い、その宣言実行システムが必要です
- 共通点の7 どちらも「不安」という扱いの難しい感情をもたらします
- 共通点の8 どちらにも共通する「怒り」も、またやっかいな感情です

グダヤ人を大量虐殺したヒトラーや、2001年6月に大阪教育大学附属池田小学校を襲撃し、8人の生徒の命を奪った宅間守の生い立ちには、共通して「幼少期に親からの厳しい体罰があった」ということが書かれています。また、筆者である森田氏が、宅間守の事件を「ジェンダー(社会的に要求される役割などの社会的性差)と犯罪」と捉えていることも興味深かったです。

宅間守の場合、幼い時に受けた体罰による恐れ、不安、辛さ、悲しさなど表に出すことさえ許されず、ため込んでしまっていました。男として、そのような感情は「やわな感情」であり、本人でさえも、それらの感情を認めることができなかったのです。それらの、ため込まれた感情たちが、いつか「むしゃくしゃする」という怒りの感情として、女性や子どもといった自分より弱いものへ向けられるようになっていったのです。宅間守は、それまでも数多くの犯罪を犯していましたが、池田小襲撃のきっかけになったのは、最も執着していた3番目の妻に離婚されたことだったようです。初めはその元妻を殺そうと考えていたのですが、興信所を使っても居所がわからず、その怒りの矛先が池田小学校の子どもたちに向けられてしまったのです。宅間守は、死刑が確定した後も、遺族への謝罪の気持ちは全くなかったそうです。むしろ、生殺しのように何もできない退屈な毎日が続くことを嫌い、早く死刑にしてくれと願っていたそうです。

森田氏は、犯人に「謝罪」という気持ちが生まれるためには、まず、犯人自身に対して「あなたの心の奥底で、怖くて、寂しくて、声を出さずに泣いている小さな少年を何十年間も無視し続けてきたことに謝りなさい」という働きかけが必要だといいます。「自分への怒りを他者攻撃行動という形で発散してきた“怒りの仮面(心や体が傷つけられる体験をたくさんしたのに、その時の気持ちを誰にも話せず、話しても共感してもらえなかった子どもは、攻撃行動という怒りの仮面の裏に悲しくて、悔しくて、怖くて、不安で、泣きたいような感情を隠し持っている)”の裏側を覗き込み、そこで今も父からの体罰におびえている子どもに共感し涙を流して寄り添えた時、彼のなかに他者への共感が生まれる。その作業には勇気がいる。傷口のまわりに巻き付けた包帯とガーゼを剥ぐ勇気がいる。痛みを痛いと感ずる勇気がいる。しかし、私たちの社会は、そうした男子、男性のそのような努力を勇気ある行動とは見なさず、むしろ『女々しい』と見なし、『強い男』ののりすることではないと見てしまうのです。」また、想像を絶する残虐行為が平然と行われるとき、それが日常空間であれ、戦争の非日常空間であれ、相手を人間とは思わない心の操作が起きており、軍隊の訓練とはそれをするのだといいます。敵国の相手を人間以下だと思わせるのです。「男たちが悲しみを、寂しさを、恐れを感じる心を否定しなければならぬ社会は、危険」と森田氏は言っています。

非行や犯罪に走る子どもたちの多くは「愛着形成不全」ともいわれています。この本を読み、宅間守、あるいはヒトラーでさえも、もしも、彼らの幼少期に周りの大人が気付けて、親からの体罰(虐待)をやめさせ、彼らの気持ちに心から寄り添ってくれる誰かがいたなら、彼らも平気で人を傷つけるような大人にはならなかったのではと思うのです。「生まれながらの悪人はいない、加害者になる前は、みんな被害者だった」といわれることがありますが、まさにその通りなんだろうと思います。

「わが子がかわいいと思えない」とか、「わが子と過ごすのが苦痛」と感じる親も増えているなか、家でも、学校や園においても、大人の言いなりに育てようとして、行き過ぎたしつけ、体罰、育児放棄などなど、子どもたちを追い詰めてしまっている現状が少なからずあります。現代社会は、もしかしたら、将来の犯罪者予備軍を大量に育ててしまっているのかもしれない。「将来の犯罪を防ぐために」が目的になってしまうのは、悲しく、虚しいものですが、やはり、どこかのどんな子どもに対しても、虐待、体罰から守り、深い愛情を注いであげるべきです。幼少期というのは、愛着関係をしっかりと築く時期です。子どもとしっかりと向き合い、子どもの行動や気持ちに対して、必ず応える。こうした毎日の小さな積み重ねで愛着が形成されていきます。子どもに限らず、人と人とが心で繋がることのできることは、この上なく幸せなことです。世界中の子どもたちを愛情深く育てることができたら、この世から戦争をなくすることさえもできるのかもしれない。